

## 召天者記念礼拝 「 生きている者の神 」 マルコ 12:18-27

イエスさまが生きられた時代のイスラエルは社会を指導する人々がいくつかの分派に分かれて対立していました。その中で大祭司長の家を中心とし、エルサレム神殿で活動していたサドカイ派というグループがありました。彼らは裕福で保守的な立場に立ち、改革を求める人々に反対していました。そんな彼らの信仰や考え方の基になっていたのは、旧約聖書の中でモーセ 5 書と呼ばれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記で、彼らはそれを唯一の基準として認めていたので、そこに書かれていない話は彼らにとっては一時的な流行りにすぎませんでした。

ある日、サドカイ派の人々は「イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして」(12:13)人々をイエスのところに遣わしました。そして、復活についてイエスさまに質問をしたのです。なぜなら、当時の多くのユダヤ人はわたしたちが普段言う天国の後に、神さまがすべての人々を復活させてくださるときが来ると信じていましたし、イエスさまもそう語られましたが、モーセ 5 書に書かれていない復活を信じていなかった(18 節)サドカイ派はモーセの言葉を引用してイエスさまに反論をしたのです。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さずに死にました。次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さずに死に、三男も同様でした。こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。」(19-23 節) この反論を聞くと、わたしたちも「確かにそうだな」と思うくらい鋭い指摘ですね。

それに対してイエスさまはこう答えられました。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。」(24-25 節)

### 復活への誤解を超えて

わたしたちがイエスさまのこの言葉を正しく理解するためには、まず解決しなければならない問題があります。言葉には誤解というつきものがあるからです。ある方はイエスさまの答えを読んで、「天国には結婚がない、夫婦関係はこの世で終わりだ」と理解しますが、イエスさまはそう言われたものではありません。それは誤解です。また、ある方はイエスさまの答えを読んで、「人が死んだら天使になるんだ」と理解します。しかし、それも誤解です。申命記 25:5-6 をみますと、モーセがこのように教えたのは、兄の跡を継ぐためであり、兄の財産を守るためでした。

イエスさまは復活のときにはモーセが教えたような跡継ぎのための結婚は必要ではない、なぜなら、そのときには人があたかも天使のような新しい体を持つようになるからだと語られたのです。そして、イエスさまは人類の中で初穂として復活され、その体が具体的にどういうものかを見せてくださいました。ですから、イエスさまが教えてくださった復活は単に体がよみがえることではなく、「天に属するその人に等しい」(一コリント

15:48)、すなわち復活のイエスさまのような新しい体に変えられるという意味なのです。

### 「聖書と神の力を知らない」者へのメッセージ

では、イエスさまがサドカイ派の人々との対話を通して本当に語ろうとされたメッセージは何でしょうか。まず、イエスさまはサドカイ派の人々が唯一の基準として信じるモーセ 5 書を引用して聖書に語られている復活について言われました。彼らが心を開いてメッセージを受け入れることを願われたでしょう。引用された「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という言葉は、神さまがホレブ山にある柴の間に炎の中で現われ、モーセを呼ばれたとき、ご自分を紹介するために語られたもので、出エジプト記 3-4 章には同じ流れで 3 回も出てきます。イスラエルはアブラハム、イサク、ヤコブによって始まった民族で、この 3 人がすでに死んだのはだれでも知っていることなのに、神がご自身を 3 人の名前をあげて紹介されたのは、彼らが死んで人々の目には見えなくなっただけれど、神の前では今存在しているという意味なのです。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神」(27 節)だからです。

また、イエスさまはサドカイ派の人々が聖書のみならず、「神の力も知らない」(24 節)と言われました。今神の前に生きている人々を復活させる力が神にあることを彼らが知らない、信じていないという意味なのです。実は、信仰の父と呼ばれるアブラハムから今のわたしたちに至るまで信仰の中心内容となるのは、神さまがいるかどうかではなく、神さまには「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる」(ローマ 4:17)力があることを信じることなのです。イエスさまはサドカイ派の人々に信仰の基本となることを思い起こし、神の力を信じる者に復活は信じられないことではないと語ってくださったのです。

どうして神さまは人が死んでもご自分の前に生かし、いつかご自分の力で復活の恵みまで与えてくださるのでしょうか。「死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」(ローマ 8:38-39)からです。その計り知れない愛をわたしたちに一人ひとりの上に注いでくださる神さまに心から感謝します。

召天者記念礼拝のときは礼拝堂のサイドに召天者の写真を飾ります。そして、召天者と共に神さまを礼拝します。すでにわたしたちの目には見えない方々ですが、召天者は今神の前に生きておられるので、わたしたちはその方々と共に神さまを礼拝することができます。そして、いつか神さまの国が完成されるとき、この世に生きている人も神の前に生きている人もキリストに結ばれている人は皆、復活され、イエスさまのような新しい体を受けて再会できると信じます。召天者記念礼拝はこのような聖書の言葉を知り、神の力を信じるわたしたちに与えられている復活の希望、再会の希望を改めて心に留めて、愛する家族と兄弟姉妹とのお別れの悲しみを超えて神さまに感謝の礼拝をささげるときなのです。